

- 北部地域は、**県内一の柑橘類の産地**であるが、**生産農家の高齢化**、相次ぐ台風の影響による樹勢の低下、柑橘類の消費の低迷もあり、**生産量が不安定**。古くから沖縄に自生しており、沖縄県民にはなじみが深いですが、県外への認知度は、一時期のブームはあったが、定着には至っていない。
- 青切り用と加工用に**分けて収穫が行われて**おり、**多くは加工用仕向け**。また一時期のブームが去り、加工品も低迷。
- **青切り用品種**の出荷期拡大と**地域団体商標登録**の活用により、販売促進活動に弾みがつき、生産意欲が向上した。

具体的な成果

- 1 新品種の栽培管理技術の確立
- 在来種は種子が多く、青切りとして活用される際の欠点の一つであったが、新品種は「種なし種」である。しかし果実肥大が遅く、収穫期後半は台風襲来時期と重なる。
 - 「種なし種」でも在来種同様の果実肥大と早期収穫が可能になる栽培技術（適期植調剤散布）を展示圃で実証。

- ① 収穫開始時期
在来種8月中旬→展示圃7月中旬
- ② 販売単価（出荷開始時期）
従来出荷開始8月中旬：約350円/kg
→展示圃出荷開始7月中旬：約600円/kg
- ③ 青切り用出荷者数の増加
平成25年度：91名→平成29年度：176名

- 2 果実の特徴に応じた販売とブランド化の推進
- 果実の特徴に合わせた利用方法により、青切り用・加工用の出荷があるが、早期出荷により販売単価が高い時期に出荷でき、また加工用仕向けが減ることで、加工用の単価向上につながる。

- 出荷期間（従来→現況）
青切り用
8月～10月→7月～10月
※1ヶ月前進化

具体的な成果

- 競合する香酸柑橘である「すだち・かぼす」との違いが明確にできなかったが、地域団体商標登録により「沖縄シークワサー」とすることで、他県との違いが明確になり、販売促進につながった。

普及指導員の活動

平成26年以前

- 種なし品種の普及のため、優良栽培農家圃場への高接ぎ等実施、農業研究センターと協力して、穂木等の確保に努め、新品種栽培方法を普及

平成26以降

- 肥大促進を図るため、施肥改善や摘果時期の見直しを行った。その中で植物調整剤による摘果時期と回数を従来の方法を見直すことで技術が確立した。

普及指導員だからできたこと

- ・ 専門技術も持ち、農業研究センターや現場での栽培方法をを知る普及技術員だからこそ、従来の方法を見直し、改善することができた。
- ・ 改善した技術を普及し、販売に結びつけることで、地域の活性化につなげることができた。

(詳細資料)

沖縄県

香酸柑橘シークワサー産地の活性化

活動期間：平成26年～継続中

1. 取組の背景

北部地域は、県内一の柑橘類の産地であるが、生産農家の高齢化、相次ぐ台風の影響による樹勢の低下、柑橘類の消費の低迷もあり、生産量が不安定。古くから沖縄に自生しており、沖縄県民にはなじみが深いが、県外への認知度は、一時期のブームはあったが、定着には至っていない。

青切り用と加工用に分けて収穫が行われており、多くは加工用仕向け。また一時期のブームが去り、加工品も低迷している。

2. 活動内容（詳細）

現在、沖縄で生産されているシークワサーは一果実あたりの種子が10個以上と多く青切り用、生果用として利用しにくい面があった。平成21年に沖縄県が品種登録した「仲本シードレス」（種なし品種）は単為結果性、雌性不稔性に起因する無核（種なし）性を示す。種子がないため、加工用としても搾汁率が高く、今後の栽培面積の拡大が期待されている品種である。この種なし品種の普及のため、優良栽培農家圃場への高接ぎ等実施、農業研究センターと協力して、穂木等の確保に努め、新品種栽培方法を普及してきた。

しかし種なし故に肥大が悪いため、その改善を図るため、施肥改善や摘果時期の見直しを行った。その中で植物調整剤による摘果時期と散布回数等の展示ほを平成27年度より設置した。

3. 具体的な成果（詳細）

①収穫開始時期

在来種8月中旬→展示圃7月中旬

②販売単価（出荷開始時期）

従来出荷開始8月中旬：約350円/kg

→展示圃出荷開始7月中旬：約600円/kg

③青切り用出荷者数の増加

平成25年度：91名→平成29年度：176名

収穫開始時期が大きく前進した要因には、展示ほの技術実証があり、具体的な技術としての成果は「NAA剤散布を満開日から4～6週間の出来るだけ早い時期に実施すること、散布濃度が高いほど果実の肥大促進効果が得られる。最も効果のあった散布時期と濃度の組み合わせは“満開日から4週間×6000倍希釈処理”で、無処理に比べて約3週間早い7月中旬に収穫が可能である。

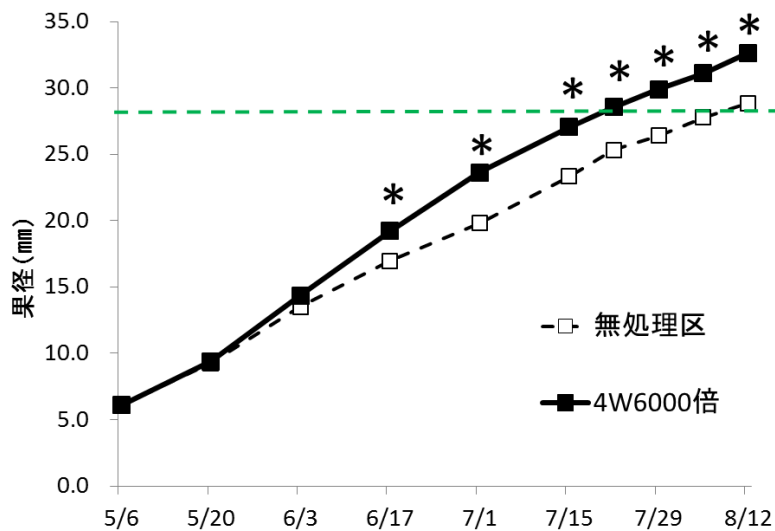


図1. 果径の推移

- 1) *は5%水準で有意差あり
- 2) グラフ中の点線は出荷基準の28mmを示す

4. 農家等からの評価・コメント（本部町O氏）

J A部会の部会長もしており、展示は実証農家でもあるO氏は、2年間展示ほを一緒に実証してくれた。O氏からは、「最初は省力化になればという気持ちで行っていたが、確実に肥大が従来よりも早くなるのがわかり、部会員の関心も大きくなるのがわかった。今後は広く技術の普及の方法について検討していきたい。今後も一緒に協力して欲しい」というっこよばを頂いた。

5. 普及指導員のコメント

（北部農業改良普及課 園芸技術普及班）

前任者が取り組んでいた内容であったため、その結果を検討し、より効果の上がる方法、農家が受け入れやすい技術という観点から現場での実証試験の設計をした。農家からの支援を大きく受けられたのが、展示ほとして成功した要因であると思われる。

6. 現状・今後の展開等

技術についてはある程度固まってきたので、それを他の地域の農家にも普及していくことが重要。技術的な結果が、うまく販売促進につながれば、技術の普及は早いと思われる。